# .hack//.G.U in the ABYSS

彡虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
.hack//.G.U in the ABYSS

【Nコード】
N2427C

【作者名】
彡虎

【あらすじ】
.hackのハセヲがアビスの世界で戦います。アビスの世界とTheWorldが繋がり、新たな物語をつむぐ。新たな絆新たな仲間と共に『世界』を動かす。ジアビスのキャラも健在

## プロローグ（前書き）

二次作品です

# プロローグ

「オイ！アトリ！クーン！」
白い鎧を纏った少年もといＴｈｅＷｏｒｌｄのＰＣ（プレイヤーキャラ）ハセヲは白と緑を基調とした服と帽子を被った少女アトリと、青髪と黄色の服が目立つ、ハセヲと比べるとお兄さんのクーンがノロノロと来るのに頭にきたようで怒鳴っていた。

クビアとの戦いに勝利したハセヲたちであったが、休む暇もなく、痛みの森の調査に来ていた。
ハセヲは痛みの森、二回目ということで慣れた足取りで進んでいくが残り二人はと言うと延々と続く道に、疲れきっていた。
しかも、ここのモンスターは、物理無効クーンは苦戦し、必然的にアトリは主力に。疲れるのも無理はない。コントローラーを握る手も腱鞘炎になりそうである。
そんな二人に気付かないハセヲは腕を組み、ついにやって来た９９階ゲートの前に仁王立ちしている。
すこぶる機嫌が悪そうで、アトリとクーンは溜め息をついた。
「おせえ！」
「そういうけどな～ハセヲ～、ここまで来んのに何時かかったと思

ってるんだ？六時間だぞ！六時間！ヤタも何考えてるんだ！？」
「そんくらいでガタガタいってんじゃねえ！だいたい、休みでフリーターだろうが！」
「ハ、ハセヲさん！」
アトリがたしなめたが、時既に遅く、肩をガックリ落としたクーンはいじけていた。
「お兄さん傷付いたぞ」
そんなこととと、ハセヲはシカトし、ゲートに消えていった。落ち込んだままクーンはアトリとハセヲが消えたゲートに入って行った。

百階、痛みの森、最奥

イベントスタート

真ケルヌンノスとハセヲたちは向き合い、走り出した。

オーヴァン、見てるか？

志乃は意識が戻ったぞ。

タビーにも会ったぞ。相変わらずだったけどな。
なあ、アンタも帰って来るよな。



「グォアアアアァァァァァァ―――！」
ケルヌンノスのコアを大剣で切り割った。
「フンッ！ずうたい程じゃねえな！」
「俺たちはボロボロだけどな」
クーンとアトリはうなずくがハセヲはまるで聞いておらず、ケルヌンノスから出てきた武器を確認し納めた。
「これでこのダンジョンは終わりだな」
「でも何も起きませんね」
確かに変だ
と怪しんだ時、ハセヲを光が包んだ。
アトリが手を伸ばしたがハセヲは消えてしまった後だった。

剣？

ハセヲは一筋の光が漏れる洞窟にいた。

目の前には岩に刺さった剣。これを見るのは二回目だ。あの頃はただ強くなりたかった。

剣を握った。

今は関わった全てのために強くなりたい。

再びハセヲは消えると膝をついた男の石像の前にいた。

ハセヲが見回すと石像が話出した。これも二回目。

「汝、我が質問に答えよ」

「……」

「汝、過酷であるが短き道、豊かであるが長き道、どちらを選ぶ？」

「俺は……俺は」

「立ち止まって景色をみる」

「何故、立ち止まる？」

「人を…仲間を待とうかと思う」

「………」

「仲間とならどんな道でも……進める！」

「汝、我の望みに叶わず。しかし、汝に望みを託す。」

「は、何いって………」

『響けローレライの声よ。』

突然響く、しらない声。

ハセヲは紫の物体に包まれ、消えていった。

同時刻、痛みの森　最奥

「ハセヲの奴、どこ行ったんだ？」
「ハセヲさん、大丈夫なんでしょうか？ヤタさんに相談した方が…」
「ここからじゃ繋がらない。ハセヲを待つしかないさ。大丈夫！ハセヲは元気に帰ってくるさ」
クーンはそういうと草に座り込んだ。
すると、クーンとアトリの周りに紫の物体があらわれ、人の形を作り、話だす。
その声は美しい。クーンとアトリはいつの間にか聞きいっていた。
紫がたなびく。
その瞬間、アトリとクーンは紫の物体に取り込まれた。

「ハセヲ、アトリ、クーン。三名の反応が消えました」
「そうか、わかった。やはり痛みの森、研究のしがいがある」
知識の蛇に含み笑いが響いた。
パイは探究心の強い上司に頭を抱えた。

全く、問題が山積みだと言うのに、と。

## 第一話　その世界はオールドランド

さわさわ

川の水が流れる音がする。
草の感触。ん、感触？

「感触だ〜？」

ハセヲは手を握ったり、開いたりした。
悟った。周りの木々、風の感覚、あるはずのない五感の絶叫が、ここは俺が知っている世界じゃねぇと。

ならここは何処だ？

空を見上げる。青い空と動く雲。あいつら、どうしたんだろう。

じゃり

土を踏む音。

振り向くと深紅の髪にセンスを疑う黒い服を着た。同い年くらいの少年がいる。

「貴様、誰だ？なぜこんなところにいる？見たところオラクルの人間じゃねえな」

オラクル？

「何処だここは？」

眉間にしわが二本できた。
「ここはダアト外れの森だ。知らずに来たのか？」

「ダアト？」

「ダアトをしらないのか！？貴様は誰だ！」

「ハセヲ、死の恐怖　ハセヲだ」

俺の世界ならわかるはずだ。

「死の恐怖？ハセヲ？知らねえな」

確定だ。ここは俺の世界じゃねぇ。

赤毛の少年は剣を抜くと俺に向けた。

「怪しい奴を野放しには出来ねえ！」

素早く俺に突っ込んできた赤毛は一閃、俺はバックステップで避ける。

「何しやがる！」

ハセヲが叫ぶと赤毛は呆然とハセヲを見た。

それは仕方がなかった。赤毛の少年、アッシュは本気で剣を振ったのだ。それが触れもしなかった。なめてかかったわけでもなく、確実に殺しにいった。

アッシュは白い鎧を纏った少年を発見した時から怪しんでいた。見たことのない鎧、風貌の少年に何故か尊敬を覚えたのだ。

だからこそ、本気で剣を振った。しかし、ハセヲと名乗る少年は軽々と避けて見せた。

危険だと思ったのにコイツの力を測りたくなった。

「いくぞ！」

「くそ！」

アッシュとハセヲはぶつかりあった。

ハセヲは双剣を出し、アッシュの剣を受けた。

そこまで強くない。ハセヲはそんな感想を持った。

アッシュの剣撃はハセヲの片手の双剣によって、ことごとく弾き返されていた。

「バカな！」

アッシュは距離をとると、そう悪態をついた。

「お前、弱いな」

アッシュは、けっして弱いわけではない。むしろ強いの域に達している。

ただ、ハセヲが強すぎた。

昔のトライエッジとハセヲくらいの技術の差がある。

「アッシュ…」

「?」

「俺の名だ！灰塵と化せ！エクスプロード！」

「な！？」

それはハセヲの見たことのない炎の塊。

こちらの世界で言う、譜術である。しかも、上級。

ハセヲは魔法だと看破すると双剣をなおし、大剣シラードを出した。

シラードの能力は魔法のダメージを半減させる。

シラードを地面に刺し、爆風を防いだ。

「くそ！死ぬかと思った」

「！？なんだと……」

アッシュは目を見張った。まさか、無傷とは思わなかった。
「なんだ……お前は？」
ハセヲは気だるそうに口を開く。
「言っただろ？ハセヲだ」
アッシュは剣をおさめると、ハセヲに近付きこう持ちかけた。
「オラクルに来ないか？」
「オラクルだぁ～？悪いがオラクル何てしらねえ」
「（俺はこんなのに負けたのか？）オラクルってのは、ダアトにある騎士団だ。まあいい。俺についてこい。聞くより見た方がよく分かる」
アッシュが歩きだすとハセヲはその背を追い掛けた。

## 第二話　ダアト宗教自治区

「ここが、宗教自治区ダアトだ」
そこは多くの家が立ち並び、奥に巨大な教会のようなものが見える。
アッシュは真っ直ぐその教会に歩いていく。

宗教って何教なんだ？

「お前は本当に何も知らねぇんだな。お前、どこ出身だ？」
アッシュは眉間の皺を濃くし、哀れんだ目をハセヲに向けた。

「しゅ、出身か…？」

俺、この世界のこと知らねぇーよ。

すると、アッシュはハッとし、
「まさか…お前…、記憶喪失なのか？」

ハセヲは否定しようとしたが、やめた。

そういうことにしておこう。その方が何かと動きやすそうだし、俺の世界について、語るのはやめた方がいいな。

ハセヲはそう決めていた時、まさか、違う場所でそのことがバレていたことをハセヲは知らなかった。

教会の中を進んでいくこと十分。でかい装飾がこったドアの前まできた。
アッシュはドアをノックするし
「ヴァンいるか？」と言うと中から
「なんだ？アッシュ」とやや、低い男の声が聞えた。
アッシュはそれを聞くとドアを開け放った。
やたらと立派な部屋に髭が印象的な男と金髪の髪をくくった女がいた。

女はハセヲに視線を向けた後、アッシュに向くと
「アッシュ！一般人を連れてくるとはどういうことだ！」
と、声を荒げたが隣の男が止めた。男は落ち着いたまま、アッシュを促し、ハセヲに自己紹介させた。

「そうか、それで神託の盾騎士団（オラクル）に入ろうと……」
「だが、アッシュ、入団にはそれなりの強さが必要なのだぞ」
「それなら問題ない」

男と女は首を傾げる。
「コイツは俺より強い」
男と女が唖然とするとアッシュはハセヲに向き、どうする。と目で語るとハセヲは
「わかった。受ける」と言い、アッシュはフンと鼻を鳴らす。

そんなこんなで試験を受けることになった。
男の名前はヴァン。総長
女の名前はリグレットである。第四師団長
アッシュ（特務師団長）って偉かったんだな。と、しみじみ思うハセヲだった。

# 第三話　試験と実力

「で、ヴァンがその男の実力をみるってわけだね。でもなんで僕まで……」

鳥のお面をつけた緑髪の少年は報告にきた一般兵士に口を漏らす。この少年の名前はシンク。リグレット、アッシュらと同じ師団長だ。一般兵士は恐縮したまま、この嫌味の塊である少年から去りたい気持ちでいっぱいだったが、補足説明をした。

「その方はなんでもアッシュ特務師団長より強いと言うことでしたので」

「アッシュより強い？ソイツ一般人だろ!?」

「そ、その筈です」

アッシュが他人を褒めるなんて珍しい。それほどの人物ということか。

「わかった。戻っていいよ」

「は、失礼します！」

兵士は急いで去っていった。

シンクは訓練所に向かって歩き出した。

「シンク、来たか」

黒い熊のような巨体の男がシンクに言うとシンクも返す。

「早いねラルゴ」

「近くで報告を受けたのでな」

「ふーん。他のは？」

ラルゴの横に座ると足を組む。

「全員集まれるそうだ」

「ラルゴ……シンク……遅れた…です」

「ハ〜ハッハッハッハッハァ〜！私もいますよ！」

「朝からうるさいよ。ディスト」

おとなしめでピンク髪の少女の名前はアリエッタ。不気味な人形を今日も抱き締め、通称オトモダチこと虎型モンスター《ライガ》もついてきている。

さっきの高笑いの正体の名前はディスト。今日も宙に浮いた椅子に腰掛け、ナルシスに耽っている。

もちろん、シンクはシカトしている。奇妙な叫びが聞こえたがシカトした。

「あっ……来た…です」

全員が向く。訓練所には白い鎧を纏った少年がヴァンと向き合っている。

「17いや18か？」

「17歳だ」

ラルゴの呟きに答えたのはリグレット。後ろにはアッシュがいる。

「アッシュ、負けたってホント？」

シンクは意地悪な笑みを浮かべ、トゲのある言い方をした。アッシ

ュの眉間の皺が増える。

「本当だ」

「ふーん、名前は？」

「ハセヲだ」

「変な名前だね」

「変……です……」

「珍しいな」

「おかしな名前ですね」

と言われ放題のハセヲだった。

「いきなりテストだなんて言われてもな」

「ただ戦うだけだ。難しくないだろう」

腕を組んでいるハセヲにヴァンはそう言い、剣を抜いた。ハセヲも双剣を抜く。

「双剣(ツインソード)か」

「惜しいな」

ヴァンの剣を双剣で止める。さすがというべきか、アッシュとは別次元の強さだ。

「ハァアアアアッ！」

ガキン！ガキン！ガキーン！

鉄がぶつかる音が響き。剣と剣が火花を散らす。
ハセヲの一閃がヴァンの袖を切り裂いた。

距離をとる。

「まさか、ここまでとはな。アッシュが負けたのも頷ける」

「手加減してんじゃねえ！」

「ならば、行くぞ！」

ハセヲとヴァンがぶつかりあい、剣を交える。ヴァンの剣が光を帯、飛び上がるとハセヲに雷が落ちる。ハセヲは雷を剣で弾く、がその

瞬間ヴァンの剣が叩き付けられ、雷が弾ける。

『襲爪雷斬』

周りの足場が吹き飛ぶと砂埃がたちこめた。

「ヴァンの勝ちだね」

「………」

アッシュは無言で見る。

皆、砂埃が晴れるのを見た。

「「「なっ!?」」」

ハセヲはヴァンの剣を片手で受け止めていた。

ハセヲはヴァンを投げ飛ばす。よほど驚いたのだろう唖然としていた。

「まさか『襲爪雷斬』が素手で止められるとは」

「偶然だ」

「謙遜する必要はない」

「……」

「ハセヲ、入団を認めよう」

ヴァンが出ていくとアッシュの所に行った。

次の日、ヴァンより強い人物として一般兵士に扱われるようになった。

# 第四話　特務副師団長ハセヲ

「あーうっとおしい！アッシュ！この服のすその長さどうにかならないのか？」
ハセヲが着ているのはローレライ教団のしかも副師団長の服である。袖を伸ばしてみたが微妙だ。
ハセヲに愚痴られたアッシュはムカつきながらも少し小さ目の服を投げ渡す。
ぴったりだったのか、ハセヲは鏡の前に立つ。
「今日はどう過ごす？任務はないだろう？」
「図書館でやることがある」
この世界について学ばねぇとな
「わかった。昼からは俺の鍛練につきあえ」
「ああ」
アッシュは、その回答に満足したのかハセヲの部屋から出ていった。
ハセヲはその後、少しして図書館へ向かった。

音素（フォニム）は七つの属性を持ち、現時点で今だ謎が多いのは第七音素（セブンスフォニム）であり、数の割合も少ない。第七音素は回復などの特異な能力を持ち、その一端が超振動である……

俺の世界とは全く異なった物体の構成。驚きの連続だ。

本を閉じ、背伸びをする。思った以上に複雑だ。譜術、譜業、音素、譜歌。全てが音を基盤に使ってあることはよくわかった。

「あの、ハセヲ特務副師団長じゃないですか？」

俺はいつの間にか、そんなたいそうな地位に立っていた。

「そうだが？」

緑髪の少年は満面な笑顔をハセヲに向け、ハセヲの手を取り、握手する。

「はじめましてハセヲさん、僕は導師イオンです」

導師イオン、確かローレライ教団最高責任者だ。こんな１２歳位のガキが大変だな。

「俺のことは呼び捨てで良い。俺もイオンって呼ぶぜ」

「は、はい！ありがとうございますハセヲ！」

「後、敬語もなしだ」

「は…うん！ハセヲ！」

やっと年頃らしくなったな。それなりに重圧があったのだろう。

ドアが慌ただしく開く音が響いた。イオン目がけて、小さな少女が走ってくる。

「イオン様～！はうあ！ハセヲ特務副師団長じゃん！」

「…アニスか」

「知り合いだったんですか？アニス？」

「前、ちょっと……」

アニス、ローレライ教団信託の盾騎士団導師守護者（フォンマスターガーディアン）所属

アニス　タトリー少佐

コイツも小さいのによくやる。

「ってこんな事してる暇ないんですってば！イオン様！会議の時間

まで後少しなんですから行きますよ！　バイバイ！　ハセヲ！」

「また、ハセヲ！」

アニスに引きずられながら、イオンはハセヲに別れを告げ出ていった。

さて、訓練所にいくか。

## 第五話　朱と翠と桃と白

「技の隙を………」

アッシュと手合わせしながら、弱点を指摘中。

『崩襲撃』

『閃光墜刃牙』

「ウオッ」

飛び蹴りからの光の高速突き。全ていなすと、アッシュは距離を取り詠唱を開始、俺は止める気はなく、シラードを出す。

『サンダーブレード』

雷の剣がハセヲ目がけて、落ちてくる。ハセヲはシラードを構え『サンダーブレード』が目の前に迫った瞬間、シラードを『サンダーブレード』に叩き付けた。

轟音が響き、訓練所の床にヒビが広がる。

アッシュが風の音素を集め、竜巻を放つ。

『タービュランス』

砂埃が晴れるがハセヲの姿はない。
アッシュは上に向くと光の束が襲いかかる。

『レイザス』

横に避けた……とおもったが、ハセヲの方が一枚上手だったようで首に双剣《虚空の双牙》を突きつけられた。敗けだ。

「甘いな、アッシュ」

「うるせえ！屑が！」

「そんなんじゃ六神将の名が廃るね」

訓練所の入り口から歩いてくるシンクが言った。

「冷やかしに来たのか？」
「ヘタレのアッシュを見に来たんだよ」

「なんだと！」

「はぁ～」

またかと溜め息をつくハセヲだった。

シンクとも鍛練し、軽く遊んだ後、部屋に戻っていった。

始まりは近い。

その夜、アリエッタが遊びに来た。
なんでも、イオンについての話だった。そんな話をしてくれるってことは少しは信頼されてるってことだよな。

元導師守護者だったことに驚いたが俺の心にわだかまりが残った。
理由も分からず解任。そして師団長に就任。あまりにことがうまく進みすぎている。
それにあのイオンが理由もなく解任するとは考えにくい。なら何かあったのか？アリエッタを解任しなければならないわけ。

わからない。
情報が少なすぎる。調べてみるか。

話している途中から泣いていたアリエッタの頭に手をやり撫で、泣き止ませ、部屋に戻るように促すとアリエッタはうっすら笑みを浮かべ
「おやすみ…なさい」と言い部屋を出ていった。

満月の綺麗な夜だった。

# 第六話　決意と真実

洞窟の中に打撃音が響く。
それが止むと気を失った人間の山に座るハセヲの姿があった。
オールドランドに来て、約八ヶ月。任務は一人で終わらせてきた。
部下は必要ないと言う所もハセヲらしく。
しかし、失敗したこともなかった。
大人数と戦うハセヲは鬼神のごとき強さで制圧し、あまりの殺気に動けなくなるものも多く、獲物を逃がさないことから、皮肉にも
《死の恐怖ハセヲ》
と呼ばれるようになっていた。しかし、実際ハセヲは誰も殺したことがなかった。未だに切り捨てられない心があったのだ。

ダアトにて

「また殺さずに拘束したらしいな」

「だからなんだ」

「まだ躊躇ってんのか？」

「あたりまえだ。簡単に切り捨てられるものじゃねえ」

「甘ぇなお前いつか死ぬぞ」

そう吐き捨ててアッシュは出ていった。
わかってる。この世界と元の世界が違うとわかってる。

「でも、駄目なんだよな」

中庭

「僕はハセヲにあまり、殺してほしくはないです。すいません、わがまま言って」

「別にいいんだ。やっぱ、生きていく限り絶対ぶちあたる壁だろうな」

ハセヲの脳裏をかすめるのはアトリの泣きそうな顔。

あいつは駄目だっつうだろな。

「ハセヲ？」

「あぁ、アトリの事を思い出してたんだ。アイツなら駄目だっつうだろなって」

イオンは思い出したように

「ハセヲの彼女さんですね」

「ちがう。ありえねぇ」

断固拒否の構え。イオンは苦笑いを浮かべる。

むやみに倒すのは駄目だ。

………なら守るために相手を倒そう。大切なものを守るために。俺は、仲間を守る。

「守る」

イオンと別れ、何をするでもなく、ぶらついているとヴァンとリグレットの声が聞こえた。ここはローレライ教団上部しか来れない通路であるため一般兵の姿はない。俺は反射的に隠れる。

「はっ！閣下！」

「導師を連れ、シュレーの丘に行き、ダアト式封咒を解放するのだ。私はレプリカの所へ今から行ってくる。その間の指揮はリグレット、お前に任せる」

レプリカってなんだ。人の名前か？

「ハセヲについてはどういたしますか？」

「見方となれば心強いが謎の多い男だからな。敵となったときには……殺すしかあるまい」

「！」

リグレットは顔をしかめたが、ヴァンはそれを見て、頬を緩め、

「ハセヲも気に入られたものだ。だからこそ、仲間にしなければならんのだ」

「はっ！」

リグレットは敬礼すると、離れて行った。

何かがヴァンを中心にして起ころうとしている。
俺はヴァンに見付からないように離れた。

次の日

眠れなかった。考えすぎてよりこんがらがる。
鍵はレプリカ。イオンが知っている可能性が高い。
聞いてみるしかないな。
ハセヲはそう決めると部屋を出た。

「ハセヲ…おにいちゃん……」

中庭に行く途中でアリエッタにあった。おにいちゃんは、あの夜、話を聞いた次の日から呼ばれ始めた。
もはや慣れている自分がいる。
「ああ、おはよう。アリエッタ」
「おはよう…です」
アリエッタにも聞いてみるか。
「なあ、アリエッタ」
寝惚け眼のアリエッタは何？と言いたげな目をしたので続けた。
「《レプリカ》って知ってるか？」
アリエッタは目に見えて、固まった。そして、俺の顔を凝視した。
突然のアリエッタの変化に俺は驚いた。
「なんで……おにいちゃん…レプリカ…知ってる…です？」
「ヴァンが言ってたのを聞いたからだ」
「………知らないです………知らないです！」
「おい！アリエッタ！」
走り去ったアリエッタに俺は呆然とするばかりだった。

これで確定した。レプリカ。それが全ての鍵。

俺はイオンがいる中庭に向かった。イオンなら、全てを教えてくれるだろうと考えながら。

## 第七話　レプリカと和平の使者（前書き）

話、長いです

# 第七話　レプリカと和平の使者

中庭に出るとイオンが木にもたれ、本を読んでいた。
俺が近付くとイオンは気付き少し横にずれ、俺はそこに座った。

「どうしたんですか？ハセヲ」

「イオン、聞きたいことがある」

「僕に答えられることならなんでも言ってください」
「……レプリカって知ってるか？」

「え！？」

アリエッタ同様、イオンも身を固くし、俺を凝視している。

「どうしてレプリカの事を？」

「ヴァンの話を聞いたんだ。俺はそれのことを知りたい」

「………分かりました。このことはローレライ教団上部しか知らないことです」
「要するに極秘って事だな」

「はい。そして、僕もレプリカなんです」

「お前がレプリカ？待てよ『も』ってことは、レプリカってのは何かの総称か何かなのか？」

「レプリカと言うのは劣化複写人間、いうならばコピーのことなんです」

「お前がコピー？」

「はい、被験者イオンはもうすでに病で死にました。被験者イオンはフォミクリーと呼ばれる因子を抜き取り、レプリカ七体を作った。その七番目のレプリカなんです。僕は」

「待て、なんでそんなにレプリカを作ったんだ？」

「レプリカと言うのは、必ず何かしら劣化するものなんです。七体の中で一番被験者に近かったのが僕でした」

「他のレプリカは？」

「火山に落とされました」

「…………」

レプリカなら簡単に殺していいのか？

「ハセヲ、それを聞いても僕を仲間だと言ってくれますか？」

「何馬鹿なこと言ってんだ？……当たり前だろ」

暗かったイオンの顔が嬉しそうな笑みが戻り、俺に抱きついた。

「ありがとう！ハセヲ」

「どういたしまして…………だな」
こいつを見てると望を思い出すのは何故だろうな。

イオンは俺から離れると真剣な顔をして俺を見つめる。
「ハセヲに折り入って頼みたい事があるんです」
「それは導師イオンとしてか？それとも俺の仲間、イオンとしてか？」
「友達としてです」
俺は頷く。
「わかった。なんだ？」
「僕とアニスは今日の夜、マルクトの協力でダアトを抜け出し、キムラスカへ和平の使者としておもむく予定です。それに護衛として同行して、いただけませんか？」
「和平って戦争でも起きてんのか？」
確かにキムラスカとマルクトが緊張状態だと聞いた。
「いえ、これから起こるので、それを回避するために行くんです」
「予言（スコア）か？」

「はい、お願いします」

平和の使者か。オールドランドを見ておきたいと思ってたんだ。ちょうどいい。

「わかった。今日、夜。ダアト港だな」

「はい」

「見付からないように支度してくる」

「気をつけて」

イオンと別れ、すぐに自室に入り、教団の荷物をまとめた。

## 第八話　ダアト出港（前書き）

次くらいにクーン出しそうです。

短いですがどうぞ！

## 第八話　ダアト出港

日が沈んだ夜、港には一つも光がともっておらず、その代わりに黒い影がうごめいている。
マルクトの軍人が警戒にあたっているからだ。

ハセヲが近付くと軍人たちが武器を構えたが茶髪の背の高い細めの男に止められる。

男はハセヲに胡散臭い笑みを浮かべ、聞いた。

「初めまして、私はマルクト帝国軍所属　ジェイド・カーティス……大佐です♪ファミリーネームに馴染みがないので《ジェイド》と呼んでください」

シャクに触るのはなんでだろうな？

「ハセヲだ」

「ええ、良く知っていますよ。『死の恐怖』ハセヲさん♪」

空気が凍った。マルクト軍人たちはハセヲを凝視する。『死の恐怖』は既にこの世界でも名を轟かせているのだから、しょうがない。
ハセヲは反応が気にくわなかったらしく、渋い顔をしジェイドを睨む。

「イオンたちは？」

「イオン様とアニスは既に入船済みです。間もなく出港するのではいってください。……まさかと思いますが裏切ろうなどと、いうことがないようにお願いしますね♪」

目が笑っていなかった。

が、ハセヲは睨み返し

「俺は裏切ったりしねぇ」

と、吐き捨てると船に消えていった。

ジェイドは満足そうに笑った。

「心強いですね〜。おっと、クーンに言うのを忘れていました……

…まあ、クーンですからいいでしょう」

ジェイドの呟きは誰にも聞こえなかった。

船内

「ハセヲ！遅かったですね」

「隠れて出てくるのに手間取った」

玄関先にいたアリエッタのライガを殴り、気絶させたことはあえて、言わなかった。

## 第九話　再会と行方（前書き）

グダグダですがよろしくっす

から本編突入です

次

## 第九話　再会と行方

船内

ハセヲは甲板に歩いてくると、先客がいた。
マルクト軍の軍服を纏ったポニーテールの細めの男。
ハセヲは何故か、懐かしさを覚えた。
男はハセヲに気付いたようでこちらを向いた。
懐かしさを覚えるはずだ。そこには似合わない軍服に身を包んだ《クーン》がいたのだから。
クーンはポカーンとする。ハセヲも驚きを隠せない。
「お前まで来てなのか……？」
「良く分かんないんだけどな。っていうかハセヲ……『こっちでも死の恐怖なのか？』」

その言葉には

『人を殺すのは辛くないか？』

と気遣うクーンの優しさがあった。ハセヲは久しぶりの感覚に薄い笑みを浮かべ
「人を殺したことはねぇよ。魔物（モンスター）はあるけどな」

「そっか～……アトリちゃんが泣かないで済みそうだな」
クーンは嬉しそうに言った。しかしハセヲはアトリと聞いた瞬間、眉をひそめた。
「おい、クーン……まさかあの電波女来てんのか？」
「そんな可哀想な事言うなって。アトリちゃんはキムラスカにいるんだ」
「なんでキムラスカに？」
クーンは困ったように笑うと納得の解答をした。
「運悪く来たとき、国境で分かれちゃってな。俺はマルクト領でアトリちゃんがキムラスカ領。あてもなくさ迷ってなくちゃいいけど……」
（なってそうなんだよな）
ハセヲとクーンは心の中で同じことを考えていた。
アトリは貴族の家で働いているとも知らず。
「それでなんで軍に？」

「あの格好目立つだろ？」
「あたりまえだ」
「それで怪しいって、あの鬼大佐に捕まってさ。あれはもう拷問だぞ。うっかりしたこと言うと、チクチク攻めるんだ。あれは精神的に病んだって」
「それでなんで疑ってる奴を軍に入れんだ？」
「目の届く範囲にいた方が監視しやすいそうだ。槍を構えて『生きていたかったら……何も起こさないようにしてください』って、満面の笑みで言われたんだぞ。しかも目が笑っていなかったし。それ以来、雑用だ」
頬の引きつった苦笑いをするクーンだった。

船内の一室にはいる。中には、イオンにアニス、ジェイドがいた。
一緒に入ってきたハセヲとクーンをみて、ジェイドは妖しく笑う。
「ク～ン。ハセヲ君とは知り合いだったんですか～」
妙な威圧感を放つジェイドに冷や汗タラタラのクーン。

「いや～～ジェ、ジェイドさん？」

ハセヲに助けの視線を送り、ハセヲはわかったと首を縦に振る。

「フフフフフ」

槍を構えて、妖しく笑うジェイドをイオンが抑える。アニスは楽しそうに見ている。絶対、腹黒いな。

「わかった！話す、話すから！」

クーンはそう叫ぶと説明しだした。

「異世界から……ですか？」

ジェイドがハセヲに聞くとハセヲは「そうだ」と答える。

「僕は信じていいと思います」

「イオン様も信じるなら私も信じようかな？　ハセヲだしね」

アニスがいうとクーンはウインクした。

(信頼されてるな)

ハセヲは意味分からんという顔をするがシカトした。

「信じがたいですが、その方がしっくりきますね。まあ、詳しい話は任務が終わってから聴くことにしましょう」

ジェイドがクーンに笑顔を向けるとクーンは引きつった笑みを返すばかり。

そんな空気、知らんとばかりに、ジェイドにハセヲは次の目的地について聞く。

「エンゲープです。そこに親書が届くことになっています」

「わかった」

苦笑いしているクーンと、とびっきりの笑顔のジェイドを残し、イ

オンとアニスとハセヲは自室に戻り、とこについた。

# 第十話　エンゲープ（前書き）

話が多いです

# 第十話　エンゲープ

王家の赤毛の少年と白茶髪の少女が超振動を起こし、タタル渓谷へ飛ばされた。
少年は名をルーク
少女は名をティア
といった。
超振動………同位体による共鳴現象である。

【そこの辻馬車！道を空けなさい！巻き込まれますよ！】
その放送と爆発音にハセヲは目をさました。
なんでも漆黒の翼とかいう盗賊を追い掛けていたとか。逃がしたらしいが。

エンゲープに降りた俺は、イオンと食糧が盗まれたという小屋の調査をしていた。
ジェイドとクーンは親書を受け取りにローズと言う人のところに行った。
イオンがチーグルとかいう聖獣の毛を見つけ、ローズの家に入ってみると
そこには……アッシュそっくりの奴がいた。
イオンがローズに毛を渡すとルークっていう疑われた奴が怒ったが隣の女になだめられていた。ルークはイオンをもう一度見ると外に女と出ていった。
外にて
「導師イオンがなぜここに……」

「導師イオン？」

「ローレライ教団最高指導者よ」

「ん、ちょっと待てよ。イオンって奴は行方不明だって聞いてるぞ。あいつを捜すからってヴァン師匠、帰国しちまうって……！」

「そうなの？初耳だわ。どういうことなのかしら……。誘拐されている風でもないし、神託の盾騎士がついていたし。それに」

「それに？」

「彼を容姿聞いたことがある気がするのよ」

「イオンの隣にいた奴がか？」

「えぇ」

「俺、あいつに聞いてくる」

「やめなさい。大切なお話をしているみたいだから明日以降にしましょう」

「ちぇっ、なんかむかつくぞ……」

ルークとティアは宿屋に歩いていった。

ローズ宅

「なんだったんだ？あいつらは」

「先程の辻馬車のお客のようです。それより、赤毛の彼……何処かで聞いたような気がします」

「大佐がそんなことという時いつもなんかあるんだよな」

クーンが苦笑いしているとドアが開き、アニスが入ってきた。

「あー！イオン様！探しましたよー！」

「すみませんアニス」

「まあ、いいですけど。大佐！親書は？」

「ここです。念のためにアニス持っていてください。なくさないでくださいね～」

アニスは渡された紙を懐に入れた。ジェイドは飲み終えたミルクを置く。

「皆さん。先に休んでいてください。特にイオン様」

「はい。行きましょう、アニス、ハセヲ、クーン」

俺たちは宿屋に入り、睡眠をとった。

次の日、イオンの布団はもぬけの殻だった。

# 第十一話　チーグルの森

俺の朝は騒がしく始まった。

「ハセヲ！イオン様がいなくなっちゃったー！」

…………

「はあ！？」

すぐさまジェイドの所に行くと、難しい顔をして

「チーグルの森でしょう」

と言った。

チーグルの森、エンゲープの北に位置する森だ。

俺たちはチーグルの森に急いだ。

その頃

「ルーク………。古代イスパニア語で聖なる焔の光という意味ですね。いい名前です」

「あなたがヴァンの妹ですか。噂は聞いています。お会いするのは初めてですね」

奇妙な再会をしていた。

「どこにいんだよ」

「もう少し奥でしょう」

森に入ったハセヲたちであったがイオンの場所が分からず、困っていた。

するとライガの大きなほうこうが聞こえた。

俺たちはそこを目指す。

洞穴にはいると昨日の赤毛と白茶髪がライガクイーンと戦っていた。

赤毛たちはライガクイーンに押され負けかけていた。

「ハセヲ、詠唱時間を稼いでください」

ジェイドはそういうと詠唱に入り。俺は赤毛たちに駆け寄った。

男と女は言い争っている。

「じょ、冗談じゃねぇぞっ！なんとかしろっ！」

「なんとかしてやるから退いてろ！」

俺はそう怒鳴るとライガクイーンに駆け、剣を振る。
クイーンの声が響き。クイーンの腕から血が飛び散った。
「なっ、俺の剣が刺さりもしなかったのに！」
「この凄まじい闘気…………思い出した！彼は『死の恐怖』ハセヲだわ！」
「死の恐怖？」
「彼の異名よ。彼は兄をしのぐ強さを持っているという噂よ」
「ヴァン師匠より！？」
そうこうしている内に、ハセヲはクイーンを圧倒していた。そして、ジェイドの詠唱が完成する。
『タービュランス』
風の竜巻がクイーンの体を切り刻む。アッシュとは比べ物にならない譜術だった。
クイーンは一鳴きすると、生き絶えた。
ジェイドはクーンとアニスを呼ぶと何事か言うとクーンとアニスは出ていった。

「……なんか後味悪ぃな」

「優しいのね。………それとも甘いのかしら」

「冷血な女だな！」

「おやおや、痴話喧嘩ですか？」

「誰がだ！」

「カーティス大佐。私たちはそんな関係ではありません」

「冗談ですよ。それと私のことはジェイド、彼のことはハセヲとお呼びくださいファミリーネームの方にはあまり馴染みがないものですから」

俺はしかめたが文句は言わなかった。

イオンが近付いて謝ってきたが、ルークが若干かばい、ジェイドとティアは意外そうにルークをみた。

話すことの出来るチーグル、ミュウについて話した後、洞窟から出た。

チーグルの長と話を済ませ、森の出口を目指す。
ティアがハセヲに探るような視線を送っていたが、出口に着いた。

するとクーンとアニスが走ってくる。

「大佐～来たぞ」

「お帰りなさ～い」

後ろからきた兵にルークとティアは囲まれる。

「ご苦労様でした、アニス、クーン。タルタロスは？」

「森の前に待機してあります。大変だったんだからなー」

「頑張っちゃいました」

困惑する二人

事情を話し、静かにさせると

「いい子ですね。連行せよ」

連行したのだった。

# 第十二話　憑神スケイス（前書き）

いやいや、連載が不規則でスイマセンが

どうぞ！

# 第十二話　憑神スケイス

あの赤毛はキムラスカの王族の偉い奴だったらしく、協力を要請することになった。
赤毛の本当の名前は
【ルーク・フォン・ファブレ】

少女の名前は
【ティア・グランツ】

分かったことは、ティアって奴はヴァンの妹らしい。どうやったらあれの次にこれが産まれるんだ？

そして、ルークは世間知らずの箱入り息子だということだ。世間に疎く、態度はでかい。誘拐されたことがあるらしく、その時の記憶喪失が原因らしいが全部そのせいにするルークに呆れた。

ケセドニアへ行くことに決まり、俺は甲板で時間を潰すことにした。
隣のクーンが背伸びをする。
「う～ん。もうすぐ国境だ。戦争、回避出来たらいいけどな」
「戦争回避は成功させるんだ。願望じゃねえ」
「そうなんだけどな……ん？ハセヲ、あれなんだ？」
クーンの指差す先を見た。グリフォンの大群。俺はそれに覚えがあった。
「アリエッタ……」
俺は呆然としたのもつかの間。
「クーン、早くイオンの所に！」
クーンは頷くと甲板を出ていった。
「さあ、来い！」
ハセヲは双剣を出すと降り立ったグリフォンの大群に走り出した。
双剣で切り裂いていくと、グリフォンと混じってライガまで出てきた。
ハセヲは舌うちをすると、鎌《万死ヲ刻ム影》を取りだし、囲んでいた魔物達を一閃し、倒すと中から一際大きいライガが顔を出した。
アリエッタのライガである。しかし、ハセヲは手加減することもな

くライガの爪を弾くと蹴り飛ばした。
ライガは甲板に着地すると雷をハセヲに落とすがハセヲは全て避けるとライガの首を切り裂こうとするが、少女の声がそれを止めさせた。
「や、止めて！」
「アリエッタ」
「殺さないで…」
ハセヲはライガから剣をひいて納める。
泣きそうなアリエッタの後ろにライガが行くと、アリエッタが撫でる。
俺はアリエッタに近寄ると甲板で働いていたしかし、今は無惨に死んだ兵士を指差し言った。
「アリエッタ、どうしてこんなことをした？」
「イオン様とハセヲ兄ちゃんを連れ戻しにきたんだもん！」
「俺たちは和平の使者でここで来てる。イオンの考えだ！アイツの意見を許してやらないのか？」
「イオン様の考え、許してあげたいですけど、でもイオン様にして貰わなくちゃいけないことがあるの！」
「シュレーの丘か？」

アリエッタの顔が少し、こわばった。
シュレーの丘は
『パッセージリンク』
要するに星のつぼ、がある場所でそこには、導師のみ解くことができる扉
『ダアト式封咒』
がある。これだけ調べるのに苦労した。
「ハセヲ兄ちゃん……戻ってこないの？」
「イオンの頼みを終えたら帰ってくるさ。だから今はイオンを守る」
「私は…イオン様を取り戻す！アニスなんかに……独り占めされたくない！」
相変わらず不気味な人形を強く握りしめたアリエッタは上を向いた。
「来て！マグマドラゴン！」
《グオオォオォォォ！》
目の前に巨大な龍が舞い降りた。ハセヲの十倍はあろうかという大きさ。
アリエッタはより一層強く握りしめると龍に命令を下す。
「行って！」
龍の口から炎が吐き出されハセヲはシラードで守るが甲板の手摺を溶かす熱さは肌を焦がした。もう一度、炎が吐き出されようとすると

「ハセヲー！げっ、アリエッタじゃん」

「ハセヲ！大丈夫ですか？」

「あ…イオン様が！」

イオンとアニスが甲板へ出てきた。ヤバイと思った時には時既に遅く、炎が吐き出された。
アレしかないと思い、アニスとイオンを背中に隠す。
「イオン、アニス。俺の後ろに」

「それではハセヲが！」

「そうだよ！ハセヲが危ないじゃん！」

「大丈夫だ。……来い」

ハセヲの体に紋様が浮かび上がってくる。
アリエッタたちはそんな俺に驚く。

「来いよ。俺は……ここにいる！スケイス！」

光がハセヲを中心に爆発的に広がり、炎も欠き消した。アリエッタたちはあまりの光に閉じた目を開く。
そこには、神々しくどこか気高さを持った死神の姿があった。

「これは？あれ、ハセヲがいない」

イオンが見回すがハセヲの姿はない。するとあらぬ所から声が聞こ

えた。
「俺だ。イオン」
死神がイオンに向くと、全員が驚いたように死神を凝視した。
「ハセヲなんですか？」
「そうだこの体は憑神《スケイス》だ。まあ、話は後だ！あの龍を倒す！」
スケイスは背中の後光の様に存在する剣の様な形状のものを展開し、宙に浮くと神速の速さ龍の横を駆け抜け、光輝く鎌で龍を両断した。
「すごい」
イオンがそう漏らすとスケイスはアリエッタの前に降り立った。アリエッタは涙目でスケイスを見ていたがスケイスが光の帯となりほどけるとハセヲがアリエッタの前に立っていた。
ハセヲが手をアリエッタに伸ばすと叩かれるとでも思ったのか、ビクッとした。がハセヲのては叩くことはなく、アリエッタを撫でた。
「別にイオンはお前を嫌ってるわけでもねぇし、俺も引き離したいわけでもねぇ」
レプリカだとアリエッタが知ったら、どれだけ悲しむかという考えに胸が痛んだ。
「それだけは忘れんなよ」

なぜかアリエッタにはハセヲの不器用な優しさが暖かかった。あの母親の様に。
その時、死体の影に隠れていたライガがアニスを艦の外へと突き飛ばした。

「ヤロー！テメェ！ブッ殺ス！」

と怒声の様な悲鳴をあげ、落ちて行った。
しかし、なぜか、絶対死なねぇなという確信があった。
そのあと、騒ぎを聞き付けてきたリグレット（スゲエ驚いていたが）にイオンが捕まり、俺も捕まったのだった。

# 第十三話　そして物語は加速する（前書き）

バトルなし　シリアス感あり　なんかありそうなまとめ兼中継ぎみたいな感じです。むずい。

比較的六神将は好きなキャラクターたちです。　アグゼリュス、アグゼリュスかあ～と考えていますアトリの出番少な！って感じでしたね。

色々飛ばしたし。私としてはヴァンも優しい人間として書きたいのですが予言への憎しみは深いだろうと言うことで、やや悪っぽく。

衝撃的な外郭大地編の終わり方を考えています。

ハセヲ、どうなるんだ？

では、どうぞ！

# 第十三話　そして物語は加速する

監獄に入れられたハセヲだったが、今までのことをまとめるためベットに横たわった。

第一に動いているのは十中八九、ヴァンだ。だが、理由がわからない。イオンを使って、セフィロトのダアト式封咒を解かせる。パッセージリンクに何か用でもあるのか？

第二にレプリカ、イオン、確証はないがルーク。フォミクリー技術の枠を結集した《劣化複写人間》。

なぜそんなものを創る必要があった？イオンはわかったがルークもだとすると、創る必要がない。アッシュのレプリカか。

『ネクロマンサーの名において命ずる。骸狩り、始動せよ！』

そのジェイドの放送と同時にタルタロスは揺れ、完全停止した。
ハセヲは通路で慌てる兵士の話を盗み聞きし、ジェイド達の逃亡を知ると安堵の息を吐く。
イオンはなんとかジェイド達と合流出来たみたいだ。
すると突然牢の扉が乱暴に開かれた。立っていたのはアッシュ、非常に不機嫌そうにいつもの眉間のシワも七割増しだ。

「どうしてお前がここにいる！」

「イオンの護衛だ。問題ないはずだ」

「なぜ、あいつといる！」
「アイツ？」

「あのアホ面坊っちゃんだよ！」

ルークのことか、やけに敵視してるな。やっぱり………

「レプリカ……なのか？」
「どうしてレプリカを知っている！？」

目に見えて驚愕したアッシュに、やっぱりかという顔をする。

「ヴァンとリグレットの話を立ち聞きしたんだ。イオンに聞いたら、教えてくれた……アッシュ、ルークはお前のレプリカなんだな？」

不機嫌そうに横の壁を殴ると憎々しげに言葉を吐く

「アイツは俺から全てを奪っていきやがった。親も友人も大事な奴も……俺の居場所を奪ったアイツが俺は憎い！」

「お前の居場所ってなんだ？」

「？」

アッシュは意味がわからないと言う顔をハセヲに向けた。

「お前は六神将『鮮血のアッシュ』じゃねえのか？偽名だとしても俺やヴァンと修行して、シンクと悪口を言いあって、ラルゴやリグレット、アリエッタと一緒に任務をこなし、ディストの馬鹿に鉄拳制裁を加えてたのは、紛れもなくお前。違うのか？」

「だが、奪ったのは事実だ」

「過去は変えられない。受け止めて進むことが俺たちにできることなんじゃないか？」

「………俺は今やれることをやる。俺はヴァンの動向を探る。お前は……ヴァンに怪しい動きがあったら、後でアイツらと合流しろ」

「わかった」

「もうしばらくはここにいてもらっていいか？」

「親書を届けるのはどうなる？」

「アレが届こうと届くまいと関係はない。モースは慌てているがあんな親書程度で戦争は回避できねぇ」

「そうなのか？」

「予言はそんな歪みをものともしない。俺は行くぞ」
牢からアッシュが出ていくと予言について、考えていた。

二週間後
ルークたちは目的地
バチカルについていた
「はぁー、やっとついたぜ～」
「初めての旅にしてはハードだったからな」
ルークの隣に立つ金髪の青年は『ガイ・セシル』
極度の女性恐怖症
「ひいいいいぃぃぃぃ！」
「いつになったら慣れますの？」

優雅さとドッシリした物腰のお嬢様が
『ナタリア・ルツ・キムラスカランバルディア』
父はランバルディア国王
ガイとルークの幼馴染みでルークの婚約者。
ルークは記憶喪失と言うことでまだ正式に受理されていない。

「ナタリア様！食事出来ましたよ！」

「アトリ、敬語はよろしくてよ」

「はい、わかりました」

「まぁ、それも敬語でしてよ？」

「ア、アトリちゃん！？」

「ク、クーンさん！？」

アトリとクーンが感動的な再会をしている頃、ハセヲは非常に困った状況にいた。

「アリエッタ、悪いな」

ライガクイーンがアリエッタの義母だと知ったときには後悔が心を締め付けた。

「ううん、大丈夫…です。お兄ちゃんは悪くないです」

アリエッタも苦しんでるんだろう。最愛の母だったらしいからな。ルークたちも殺らなければエンゲープが滅んでただろうからな。恨みたくても恨めない。

今のアリエッタにイオンのこと話すべきか？アリエッタが耐えられるか？

でも、知らずにいることの方が悲しい。

ハセヲはアリエッタに

口を

開いたのだった。

「……嘘…嘘…嘘！そんなのアリエッタ信じないもん！本物のイオン様死んじゃったな…んて……信じ、ないもん」

アリエッタ、お前も薄々気付いてたんだろ？でも嫌だったたんだろ、理解するのが？でもそれじゃあ前に進めない。進むんだアリエッタ。全て受け止めて、また、進もう。

泣き疲れて眠ったアリエッタをベットに横たわらせ、外に見えるバチカルを数秒眺め、睡眠をとった。

明くる日

イオンが俺の入っている牢へシンクに連れてこられた。
「ハセヲ、暇じゃないの？」
と皮肉を言ったが俺は

「囚人が歩き回ってる方が変だ」

と返した。

イオンはハセヲを見ると満面の笑みで抱きついた。
「皆さん心配していたんですよ？」
と言われたが苦笑いを浮かべることしか、できなかった。

次の目的地はザオ遺跡のセフィロトだ。

バチカルにて
ルークは親善大使に選ばれた。行き先はアグゼリュス。
なんでも障気と呼ばれる毒に町が汚染されているということだ。
その民を助けることが今回の視察である。

「ルーク、私とローレライ教団に来ないか？」

「え？」

ヴァンの言葉に驚くルーク。しかし、ヴァンへの絶大な信頼と自由への憧れから

「はい」と返事してしまう。

「ハセヲのことなのだが、もしかするとハセヲはアグゼリュス消滅を企んでいる可能性があるのだ」

「え！？アイツが！」

「確証はないのだが、今、ハセヲは捕縛されているが逃げてルークたちと合流するかもしれぬからな。気をつけておけ。ルーク」

「はい！」

ハセヲがそんなヤバイ奴だったなんて、よし、俺が超振動で障気を消してハセヲの計画を壊してやるぜ！

ヴァンが見下すような笑みをルークに向けたことにルークは気付か

なかった。

# 第十四話　アグゼリュス崩落とハセヲ（前書き）

できることなら後書きもみてください

## 第十四話　アグゼリュス崩落とハセヲ

「ありがとう……ですハセヲお兄ちゃん」

泣き腫らした笑顔でアリエッタは答えた。

イオンがアッシュたちにザオ遺跡に連れていかれて数時間後、アッシュたちは戻ってきた。

「イオンはアイツらに返した」

と、アッシュに耳打ちされ、ハセヲはわかったと呟いた。

ハセヲは安心したのもつかの間。ダアトに連れていかれ、監獄に入れられた。

アリエッタがハセヲの牢の前にいるのをアッシュは見つけ声をかけた。

「アリエッタ、なぜここにいる？」

「あ、アッシュ……もうすぐ総長の計画始まる…ですからハセヲに伝えに」

アッシュは総長の計画と言うところに食い付いた。

「やっぱり、ヴァンは何か企んでやがるんだな！？」

「アッシュのレプリカを使って、アグゼリュスを崩落させる……で

す」

「なんだと！？」

アッシュはすぐさま牢の警護の兵士を倒すと鍵を開けハセヲにヴァンの計画を話した。

「なんだと！じゃあ早く行くぞ！時間がない！」

慌てるハセヲにアリエッタが鳥たちに声をかける。

「ハセヲお兄ちゃん！鳥たちじゃ無理……です」

「大丈夫だ！」

そう返答したハセヲにアッシュとアリエッタは首を傾げ、外に走っていくハセヲの後を追っていった。

息を切らした二人はやっとハセヲに追い付く。

「おい！ハセヲ、どうやって行くつもりだ！こんな森の中で！」

「来い、来いよ！俺はここにいる！」

紋様が浮かび上がる。アッシュは驚き、アリエッタは前のことを思い出した。

「《スケェエェィイス》」

アバター『スケイス』を発現させると二人は手を差し出す。アッシュは困惑した顔をしたが考えがわかったらしく乗った。アリエッタはすぐに乗る。

スケイスは背中の飛行物体を展開すると宙に浮く。

【行くぜ！】

ハセヲの声が響くと、有り得ない速さで飛び立った。

「ルーク、早まんなよ！」

「さあ、ルーク。ここへ」
白い煌めきに光るパッセージリンクの前にヴァンはルークを誘い。
そこに立ったルークに暗示を解放した。
それと同時に近くでみていたイオンの体が吹き飛ばされた。
ルークの手から超振動が発動したのだった。

ハセヲたちが着くとティアが捕まえられている所だった。すぐに兵士を叩きのめすと事情を話すと泣きそうな顔で一緒に走り、アグゼリュス第十七番坑道に入り、すぐにジェイドとクーンと再会したが共に進んでいく。
「ハセヲさん！」
「アトリ！」
飛び付いてきたがハセヲは軽やかに避け、クーンは

「ヒド」と言い、アトリは涙目でハセヲを見たがハセヲは奥へ更にスピードを速めて進んでいく。

走り込むとルークが倒れた姿が目の端に写った。双剣を出し、とんでもない高さから飛び下りた。

その位置エネルギーをヴァンに叩き付けるが軽くいなされ、距離をとる。

「無茶をする」

「アグゼリュスをなぜ！？」
「予言を実現させたまでだ」

「予言ってなんなんだ！？」
「人が楽に生きる拒否のできぬ道しるべとでも言うべきか」

ヴァンは剣を鞘に納め、手を差し出した。

「我々と来ないか？」

「行ってどうなる。そんなもん、自分達でやれよ！」
「邪魔はしてくれるなよ」
「俺の仲間を苦しめない限りはな」

崩落を始めたのか、地面が震えだす。ルークもそれで気付いたのかぼんやりと立ち上がる。

「師匠……にハセヲ！」

ハセヲを見たルークは驚愕し、剣を取りだした。

ハセヲは剣を取り出したのに気付かず近寄る。すると…………

———ドスッ

ハセヲは自分の胸を見ると剣が刺さっていた。刺しているのは……

「……ルー…ク」

「アグゼリュスを滅ぼさせてたまるか！」

勘違いしてるのか

くそ…いてぇ

「ハセヲ！」

「ルーク！」

飛込んできた皆が目にしたのはハセヲの体を貫通したルークの剣だった。

ヴァンも予想外だったらしく呆然としたがアッシュとアリエッタ、ティアが入ってくると鷲愕鳥を呼び、アッシュを捕まえ、去っていった。

「ハセヲ！」

「ハセヲさん！」

皆が近付いてくる。
見るまでもなくハセヲは重傷だった。
血は止まることなく流れ続けている。

ティアとナタリアとアトリが回復呪文を唱えるがあまり効果がない。
アトリとアリエッタが泣き付いたが崩落は進行していく。

「いや！お兄ちゃん！もう大切な人、死ぬ…いや！」
「アリエッタ、ルークを恨むなよ。虚しいだけなんだからな」

トライエッジのことを思い出しながら言う。

「わりぃな」

「ヒック、ヒック、うわあぁぁあん！」

ついに泣き出したアリエッタの頭を撫で、アトリに向く。

「なに、おまえまで泣いてんだ」

「でも、ハシェヲさ～ん」
「眠くなってきた。わりい寝る。クーン！たのむぞ」
「バッカヤロウ」

「ハセヲ」

「イオン、お前が全部しょいこむなよ」

「はい……ハセヲ！」

「なんだ？」

「また」

イオンの横からジェイドも出てくる。

「私からも、また」

「アニスちゃんからも！また帰ってきてよね」

ティアも

「また」

ハセヲが
「わかったよ」と言うと、ハセヲの体が輝き透けてくる。
最後に浮かんだ顔は白い泣き顔だった。
ほどけるようにハセヲの姿が消えてなくなった。

「我々も急ぎましょう。ティア、譜歌を！」

崩落の中、歌が響いた。

【響け、ローレライの声】

外郭大地編　完

## 第十四話　アグゼリュス崩落とハセヲ（後書き）

ルーク、ハセヲ好きの皆さんすいません。私も書いてて悲しかった。
でも物語上こうせざる負えなかったんです。一区切りなので
次回予告でもしてみたいと思います　　　　　　　　　　帰ってき
たのか？　　ロ　　　　　　　　　　　―ど
レ　う　　　　　　　　　ラ　　だ　　アウラ　　　イ　ロ　っ
　　　　　　の　ス　　た　　　　　　正　ト　　　か
体　グ　　　　ね　　　　っ　ラ　　　　　？　　　て　ウ
　　　　　　何　ン　　ユリア　　　　だ　ド
？新章　深淵世界　アビスグラウンド

# 第十五話　オールドランドとは？（前書き）

有り得ないことを喋りまくります。

完全捏造です

新章　スタート

## 第十五話　オールドランドとは？

俺が目を覚ましたのは、オールドランドではなく。
リアルの俺の部屋だった。
起き上がり、鏡で何度確認しても俺は生きていた。
そして、帰ってきた。

——ピロピロピ！ピロピロピ！ピロピロピ！
パソコンのメール着信音が鳴る。
確認すると…
ｆｒｏｍ　パイ
至急、レイヴンへ

ハセヲが知識の蛇へ入ると碑文使いが集合していた。エンデュランスが優雅で軽やかに近付いてきたが避け、ヤタに話しかける。

「クーンとアトリはアッチだ。分かってんだろ」

パイ以外の碑文使いは首を傾げるヤタは不適に笑いと言う。

「痛みの森から君達は確かに反応が消えたが……君達の反応はＴｈｅＷｏｒｌｄの中に存在していた」

「なんだと！」

ハセヲは驚愕する。

「なら、あの世界はＴｈｅＷｏｒｌｄにあるってのか！？」

「そこでその世界について聞かせてもらいたい」

「…わかった」

五感のある世界、音が全てを支配する世界、戦争が始まる世界、オールドランドという名前、三つの国、そしてレプリカ。

ヤタは顎に手を当て、考えるポーズをとる。

「興味深いな。その未知の世界は」

ヤタが

「これを見たまえ」と言うと知識の蛇のコンソールからホログラフが出る。二つの球体が生まれ、大きい球の方にはＴｈｅＷｏｒｌｄと書かれている。

「私とパイが君達の追跡を試みるとＴｈｅＷｏｒｌｄというネットワークから外れた新たなロストグラウンドを発見した」

「まて、ヤタ。ロストグラウンドはＴｈｅＷｏｒｌｄが作り出したもののはずだ。ネットワークから外れるはずがねぇ」

「確かにロストグラウンドなどの不確定要素は『自立型ＡＩアウラ』が創り出したと思われる。仮説として、だがそのローレライと呼ばれる者は『自立型ＡＩ』ではないかと思うのだ」

「自立型ＡＩ（人工知能）」

「おそらく、《アウラプロジェクト》で廃棄されたＡＩ集合体だろう」

「《アウラプロジェクト》？」

「《アウラプロジェクト》とはＴｈｅＷｏｒｌｄを人の管理無しに監視し、調整、修正する管理プログラムを創り出す、単刀直入に言うと

『ＴｈｅＷｏｒｌｄの神』

を創り出そうとしたのだ。その時、多くの不完全ＡＩがＴｈｅＷｏｒｌｄに存在したが大半が消去されたＲ１時代の話だが。それが外に流れ、集合体を形成し、この」

もう一つの球を指す。

「新天地を創りあげたのだろう」

「そうだったのか」

「ハセヲの話からアバターや武器の出現に支障はない。ハセヲ」

「なんだ？」

「我々もその世界に行くぞ」

「はあ！？」

、

# 第十六話　新世界への突入（前書き）

ヤタ喋りすぎー！　自分の感想です。スイマセン。
まだアビスキャラと絡みません　ではどうぞ！

# 第十六話　新世界への突入

痛みの森７６階

「ここだな」

ヤタはそう呟くと壁に手を当てる。すると壁が歪み、真っ黒なホールへと変化を遂げた。

「僅かだが変化しているようだな」

「あっちで何かあってるのか？」

「その様だな」

ヤタは皆を振り返り、言う。

「心の準備はいいか？」

皆が視線でかえすとヤタは不適に笑い、ホールを開けた。

そして…………

【時よ、我が声に従え】

「で、なんで空に移転してんだよ！」

「………盛者必衰の理を表す」

「ちくっしょ〜〜！」

ハセヲたちはアバターを表し、地面に着地した。

notice
ヤタは
『何とかも筆の誤り』と
『明鏡止水』
の称号を手に入れた。

ｎｏｔｉｃｅ
ハセヲは
『再来、死の恐怖』と
『危うく自分も死の恐怖』の称号を手に入れた。

ｎｏｔｉｃｅ
朔望は
『策謀家ゴレ』と
『エン様命！』
の称号を手に入れた。

ｎｏｔｉｃｅ
パイは
『悩みは尽きぬ』と
『場違い衣装』
の称号を手に入れた。

ｎｏｔｉｃｅ
エンデュランス
『どんな時でも華麗に』と『薔薇は綺麗に咲き誇る』の称号を手に入れた。

差し当たり意味はありません。

「ここはルグニカ平野のようだな」

アグゼリュス崩落からどれくらいたってんだろ
ヤタの話なら俺たちが消えてから全く時間は進んでいなかった。

ルークたちは今どこにいるんだろうな。クーンも約束守ってるかな

その頃

「ハックシ」

「大丈夫ですか？クーンさん」

「悪い噂でもされたかな？」

グランコクマへの徒歩の道でそう呟いた。

「どうするハセヲ？ここの地理に詳しいのは君だけだか」

「まず、グランコクマへ行こう。あそこはマルクトの首都だ。ジェイドの名前を出せば、少しは情報が入るはずだ」

そういったハセヲにパイは驚き気味にいう。

「貴方が人を頼るなんて珍しいわ」

「手段は問わねえさ」

不適に笑うとグランコクマのある方向へ歩き出した。

## 第十七話　何が罪なのか（前書き）

遅くなりました。しかも少ない。すいません

## 第十七話　何が罪なのか

ハセヲが消え、未だに意気消沈したアトリとクーン、アリエッタを連れた元親善隊はむせかえるような濃い瘴気に顔をしかめる。

魔界（クリフォト）

その名の通り凄惨な紫の光景が広がっている。

崩落し、魔界の瘴気の海にも呑み込まれ始めたアグゼリュスの破片。人の死体が所々に横たわり崩落の結果をまざまざと見せ付けていた。

ルークは奇跡的に無事であったタルタロスの甲板から酷い瘴気の漂う海を見下ろしていた。今でもハセヲを貫いた剣の感覚を鮮明に思い出す。師匠が嘘を言うわけがないと思う心にハセヲの姿が突き刺さる。

イオンを守る無愛想で怪しく強い、師匠の部下。
それだけの感想しかもたなかった。
師匠が俺の窓、俺の扉、俺の夢だったんだ。

何も知らなかった。

何も知れなかった。

俺は自由がほしかった。記憶喪失の前と今の俺を比べないでほしかった。家族との違和感が苦しかった。檻の中で勉強に縛られるのが

嫌だった。師匠だけがそんな世界で優しかった。それにすがって何が悪いんだ。

俺は悪くない

俺は悪くない！

失望され、比べられ、見捨てられていく。

でも、一人だけ残っていた。

アトリだった。

「何だよ…お前も俺を責めるのか？あっち行けよ！」

そんな赤毛の少年にアトリは自分を重ねる。
自分の弱さが他人を傷つけてしまう。きっとハセヲさんがいなければ自分は…。

榊の事を思い出したアトリは頭をふる。
ルークさんは昔の自分なのだ。全ての責任を人に押し付け逃げていい

た頃の自分。

ハセヲさんだったら…と考えたアトリだったが、それでは駄目だと自分を奮い起たせる。自分にしか出来ないこと、それは何なのか。

アトリは何も言わず、ルークを抱きしめ頭を撫でる。ルークは驚いたがいつの間にか肩を震わせ泣いていた。

アトリはただルークの頭を撫で続けた。

アトリにはそれしか出来なかった。

、

# 第十八話　突如降った戦闘（前書き）

前編という感じですね

## 第十八話　突如降った戦闘

アトリがルークと話している時、クーンはブリッジに入っていくジェイドを引き止めた。
「待ってくれ大佐！」
ジェイドは珍しく眉を潜めたままクーンに向く。

「なんですか？クーン」

「さっきのことだ！確かにルークは無責任なことを言った。だが、ルークがヴァン謡将に絶対の信頼をおいていたのは大佐も知ってただろ？」

またその話か。と言うように眼鏡を直し、溜息をついた。

「クーン、確かに私たちはルークがヴァン謡将を盲信していたことを知っていました。何一つ相談しなかったことについて、ヴァン謡将が口止していたのでしょう。ただ、私はルークの無責任さに憤りを感じているんですよ、クーン。そして、ルークの変化に気付くことが出来なかった私自信に」

そう、レプリカと言う禁囲を侵した自らの罪
私はルークに悪態を着く資格はないのかもしれません。自らの罪が更なる罪を重ねる苛立ちの矛先をルークに当てた。私もまだまだですね。
とジェイドは心の中で溜息をつく。

ジェイドがクーンに背を向ける。
クーンは何も言うことが出来ず、ブリッジに消えるジェイドを見送ることとしか出来なかった。
ジェイドがブリッジに消えた後もそこで考え込んでいたクーンは、ある異変に気付いた。
一瞬、ノイズがはしったのだ。
「ノイズ!？馬鹿な！」
ありえない。まさかこの世界もプログラムなのか。嫌、それより嫌な予感がする。
クーンは色々なことを考えながらアトリがいる甲板へ走り出した。

アトリがノイズを見たのはルークがタルタロスに入った後だった。自分も入ろうとしていたアトリが振り向いた時、そこには……紛れもない自分がいた。

「わ、私？」

アトリの姿そのままにしかし色合いがまるで違う。体の大部分は黒で統一され所々に紫の線が入り、肌は人形のように白い。目は黒く瞳が紅く狂気を帯ていた。

アトリの脳は現実に追い付かない。
そんなアトリにその理解不能ないるはずのない“もの”は目の焦点を合わせると、やはり狂気じみた表情で笑う。口角はありえない程

つり上がり目は猛禽類のように細められ、ただ“獲物”を見る。
その“もの”は跳躍しその“獲物”に襲いかかる。
あまりの殺気に、その“獲物”は固まり、襲いかかる“もの”をただ見つめることしか出来ない。
その“もの”の異様に伸びた鋭い爪がアトリの喉を裂こう、とした瞬間

『烈球繰弾』

白い閃光が“もの”を吹き飛ばし“もの”は端へと激突する。

「大丈夫か？アトリちゃん」

アトリを助けたクーンはそのアトリそっくりの“もの”に銃を向ける。

「なんなんだコイツは……」

そのアトリに似て非なる“もの”が立ち上がると無惨にも腹の真ん中に大きな穴があき所々バグ化していた。
アトリは息を飲んだがその“もの”の目を見て再び杖を構える。その目は未だに狂気を帯ていたからだ。

「お前は誰だ！？」

クーンが解答を求めるが“もの”は蹲る。

「あなたは……」

アトリはその姿につい近付いてしまった。

クーンは蹲るその“もの”が笑みを作ったのを見逃さなかった。

クーンは身震いするほどの寒気に襲われる。クーンは近付くアトリを止めに入ろうとした瞬間、その“もの”を中心に巨大な球状のデータフィールドが形成されアトリも呑み込まれる。クーンは汚物のごとく弾き飛ばされ、フィールドの外に取り残された。

球状の膜をアトリ、クーンが叩くがまるで効果がなく外に出ることができない。

アトリが呪文を唱えようとした時、クーンがアトリに叫ぶ。

「伏せろ！アトリちゃん！」

アトリは反射的に伏せると頭の上を光の束が通りすぎる。

『レイザス』だ。

アトリが振り向くと、さっきよりも更に禍々しい自分がいた。狂気の表情を変わらずたたえ、あいていた筈の腹の穴は見る陰もない。

右手には【陽炎ト踊ル巫女】と似ているがやはり色合いが違う灰色の杖が一本。左手は先程より長く鋭い爪を携え、黒く濁った色で光る。

アトリは恐怖を必死でおさえ、立ち上がり【陽炎ト踊ル巫女】を構える。

その“もの”は形容しがたい声を上げ、アトリへと杖を振る。

相手の姿に合わせ、アトリも杖を振った。

『『レイザス』』

それと同時にクーンはフィールドに割り込む方法を探し始めた。

、

# 第十九話　何ができるのか（前書き）

遅くなりましてすいませんでした！

# 第十九話　何ができるのか

白と薄い碧で彩られた体が甲板に叩き付けられる。
満身創痍のアトリは、その激痛に顔を歪め、しかし諦めの表情は出さずに杖を握り立ち上がった。

――痛いな……ダメ！弱気になったら。もう少し待ったらクーンさんが……

ぼんやりとした意識の中でアトリは弱音を吐いた自分を叱咤した。
がアトリはハッと気づいた。

――私、また誰かに頼ってる。ダメ！自分で何か出来なきゃ！……でも

アトリは立ちはだかる『自分』を見る。
相変わらず浮かんでいる狂気の笑みにアトリは、もう脅えない。
しかし、実力の差を受け入れつつある頭はアトリに諦めのサインを送り続ける。それでも――

――私は諦めない！諦めたくない！

アトリは、がむしゃらに敵にぶつかっていった。

---

クーンは敵にぶつかっていくアトリを見て、更に顔をしかめた。
そして、クーンは何度目かも、もはや分からない全力の弾を撃つが球体に弾かれ、効果は無かった。
「くそ！駄目か！……ならば！」
球体から距離をとるとクーンは《自分》に語りかける。
「頼む……お前だけが頼りだ。打ち破ってくれ、俺の……【メイガス】！」
緑と黄と水の色合いの光がクーンに集まり巨大な、上半身は人、下半身は魚の様な形態へとなっていく。
モルガナ因子より産まれいでたイリーガルな存在、ハセヲの【スケイス】と肩を並べる、クーンの【メイガス】である。
発現させるとすぐに、クーンは力を収束させた。【メイガス】がデータドレイン体勢に入ると球体中心部へと狙いを定める。
「消え去れ！データドレイン！！」
瞳の様な形状の発射口から弾が発射され、球体に激突した。
それと同時にクーンの中にデータが流れ込んでくる。

――なんだこれは！

絶望、喪失、憎悪、ありとあらゆる負の感情が流れ込んでくる。頭と憑神（アバター）が締め付けられるような圧迫感で悲鳴をあげた。

ドレインを中止し、情報の放流を防ぐ。

幸運にもデータドレインが激突した場所に穴が開き、侵入可能となっていた。

「何だったんだ？……いや、それよりアトリちゃんを助けるのが先だ」

クーンは先程の情報に疑問を感じつつも球体に侵入した。

なんとか踏ん張っていたアトリの前に【メイガス】が舞い降り、敵に立ちはだかる。

「大丈夫か？アトリちゃん！」

「はい……クーンさん」

疲れ果てたのだろうアトリはその場に座り込んだ。クーンは敵を睨みつける。

「いったいお前は何者なんだ？目的は……」

この時、クーンは気付いていなかった。クーンが使った憑神をアトリが何故、使わなかったのかを。

いや、正確には使えなかったのだ。この球体の中では。

異変は突如起きた。【メイガス】が二重にぶれたかと思えば光となって消え去って行く。クーンは信じられないと言う風に自分を見渡す。

活動を停止していた敵が跳びかかってくる。クーンは寸前で回避し銃を敵に向け、発砲する。命中しても、敵は顔色一つ動き一つ変えず襲いかかり続ける。不死の敵に劣性となっていくクーンとアトリはそれでも戦い続けた。

しかし、その戦いに終止符が打たれようとアトリに敵が迫る。クーンもアトリをかばうように前に出、死を覚悟したその瞬間、球体を突き破り敵を真っ二つに切り裂いて使者が現れた。

蒼炎の使者が。

、

## 第二十話　蒼炎は幽鬼の如く（前書き）

大変永らくお待たせしました。本当に済みませんでした。また、頑張って連載します

## 第二十話　蒼炎は幽鬼の如く

相変わらずの不気味なオーラも笑いたくなるほどの安心感を与えてくれる。

何を考えているか解らない表情も気にならない。

蒼炎を背負う、カイトと言うかつての英雄をもっした少年は三又の双剣をかざし、真っ二つにしたモノ「モノ」にとどめをさすべく振り下ろした。

グシャリ……

双剣の突き刺さった顔で笑顔を浮かべるそれはカイトの胸に腕を突き立てていた。

しかしカイトは変わらず冷めた眼で、それを掴み上げ端へと投げ飛ばす。

「！！」

カイトは片手を突き出す。

紛れも無い『データドレイン』の構え

さらに双剣が自ら意志を持つかのようにそれの両肩に突き刺さり宙に浮き上がる。

クーンが喉を鳴らした瞬間まばゆい輝きをカイトの片手が放ち、それに突き刺さりる。

そこでクーンはカイトのドレインが今までと違うことに気がついた。

ドレインを受けるそれが異常なほど、けいれんをもよおしているからだ。

「ふ、膨れて」

アトリも気づいたように震えた声で呟く。クーンはこれが情報過大によるフリーズとパンクであると当てをつけていた。

カイトはデータドレインによって相手にデータを送り込んでいたのである。

体中にひびわれたエフェクトが刻まれたそれは何も話すことさえ叶わず吹き飛んだ。

「やったのか……？」

「あぁ……」

アトリは腰が砕けたのか、座りこんだ。

クーンがカイトに近づく。

「ありがとうな…ってどうした！？」

クーンはカイトが薄れていくことに驚きの声を漏らす。

駆け寄ろうとするとカイトは後ろ手にペンダントを投げ渡した。

クーンがキャッチするとカイトは消え去った。

クーンはペンダントをみる。

ペンダントは淡く紫に光るのみであった。

、

**ＰＤＦ小説ネット発足にあたって**

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2427c/

.hack//.G.U in the ABYSS

2010年10月9日02時05分発行